

## ➤ 大宅壮一、王仁三郎に会う

出口王仁三郎(以下、王仁三郎と略す)とはいったい、何者だったのでしょか。何万という歌詠みでもあった故に歌人ともいえるでしょう。屏風などにも大胆に毛筆で絵や書を書き、金重陶陽や加藤唐九郎など一流の陶芸家から絶賛される作品を創るという点からすれば、陶芸家と呼んでいいかもしれません。

本人は「芸術は宗教の母なり」というほど、芸術に価値を置き、

「芸術の 趣味を悟らぬ人々は  
地上天国夢にも来らず」

と詠うほどであり、彼が第三者に小説と称する『霊界物語』は83巻に亘る膨大なものです。本来はもっと書き続けるものだったのですが、外圧もあり途中で筆を措かざるを得ず、そのエネルギーはまさに凡人の域を超えています。

世間からは宗教家と見られていますが本人は、大本教は宗教ではない、とも言っています。戦後、「駅弁大学」「一億総白痴化」「男の顔は履歴書」といった流行語を生みだし、その個性的な表現でマスコミ界で大活躍した評論家の大宅壮一は戦前、京都の亀岡を訪れ、1931年「出口王仁三郎訪問記」を書いています。当時、大宅は30歳ほどです。それを読むと、王仁三郎の素顔といったようなものが良く表われています。

仲間内の大本信徒や出口家から輩出した作家や先生のような身内でない故に、客観的に王仁三郎という人間を明らかにしているかもしれません。

## ➤「聖師は平民的な方です」

少年時代の大宅にも王仁三郎は、「偉大なる予言者として、僕の村に近い町へやってきた」と映るような存在で、大宅は友人に誘われ、「恐怖と好奇心にふるえながら、わざわざ一里の路を町まで出かけて行ったものだ」と書いています。

「説教の内容には別に感心しなかったがそうした

あたりの雰囲気——緊張した、いわば革命的というべき空気が僕を引きつけた。そのなかにひたっていると、近い将来になにか大事件、この世の中が、ひっくりかえるような大事件が起こりそうな気がしてくるのだった。そして多感の少年の胸は、漠然とした大恐怖でおののきながらも、どこかでそれを待ち望んでいるようにも感じられた」と記しています。その時の大宅の友人はすっかり大本教に魅せられ、信者になり宣伝使(布教師)になったそうです。

亀岡の宿で一休みして大宅が、宿の人に紹介状もなしに王仁三郎が会ってくれるだろうかと言うとその人は、「ええ、会って下さいますとも! 聖師様(王仁三郎のこと)はそれはそれは気軽な、平民的な方でして、このあたりへもよくご散歩にお出ましになりまして、わたしどもつかまえてよく冗談口をおききになりますわ」と言うのだった。

## ➤「大本は宗教ではない」

「王仁三郎聖師は、浴衣の上に縞の羽織を引っかけて、頭には妙な烏帽子のようなものを頂いているでっぴり太った、がっしりした体格の大男だ。年齢は六十歳以上らしいが、どこか全体に若々しい元気がある。顔も、声も大きい。一口に言えば善良な牡牛の感じだ」

王仁三郎と大宅の会談の席には若い信徒らがつめかけ、二人の会話を書き留めようとしています。大宅はその中で、短歌や『霊界物語』などについて聞いた後、次に、この怪物に向かって、当時盛んだった反宗教運動に関する意見を聞く機会をとらえました。

「反宗教? わしの方は大賛成じゃ。もともとわしの方は昔から反宗教で押し通して来たんじゃからな」

「でも、大本教だって宗教の一種である以上は、反宗教運動の対象になるんじゃないですか?」

第23回 出口王仁三郎とは何者か?  
ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後口中関係史』

大類 善啓(おおるいよしひろ)

混沌の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ!」

「いや、大本は決して『宗教』じゃない。『大本教』というのは、いわば新聞辞令で、わしの方は『大本』といってるだけじゃ。『大本』は、政治も、経済も、芸術もみんな引くくめた、宇宙の大本を説いているのであって、現在ある『宗教』のようなけちなものと違う」

王仁三郎はこの時、本願寺その他の既成宗教の腐敗堕落を罵って、大いに新興宗教の意気込みを見せた。大宅は書く。そして既成宗教に対する大本の戦闘的な態度を、王仁三郎の歌に表れている、と次の3つを挙げています。

- 宗教は数多あれどもおしなべて営利会社の変名なりけり
- 宗教に美名にかくれ曲神は人の汗吸いあぶら飲むなり
- 宗教は牧師僧侶をふりすてて人の心の奥底に棲む

### ➤ 人を縛らない教祖

戦前、アメリカのハーバード大学に留学し、日米戦争の勃発によって帰国せざるを得なかった、今は亡き鶴見俊輔は戦後、『思想の科学』などを刊行し、独自の市民的な思想活動を展開し新興宗教にも関心を寄せました。その鶴見は、日本の教祖には人を縛る人と、人を縛らない人がいて、その多くは人を縛る教祖が多い。しかし、王仁三郎は人を縛らない教祖だから好感を持てる、と書いているのを読んだことがあります。

私が王仁三郎に会った古い大本信徒に話を聞くとみな、その大らかな王仁三郎の人柄に魅せられています。

戦後も多くの人たちが、人生相談などを含めて王仁三郎に面会を申し入れました。天衣無縫な王仁三郎は、時にふんどし一つで現れたりしたようです。

今でも古い宣伝使から私が直接聞いた話で印象深かったのは次のようなエピソードです。

銀行に勤めていたある紳士が王仁三郎に面会を求めました。男は王仁三郎が現れるとすぐさま「17歳になる息子のことで相談に参りました」と言ったところ、王仁三郎は、「あんた17年前に何した？」

一喝しました。男はそう王仁三郎に言われると、ぶるぶると震えました。17年前に銀行で不祥事か何かあったのでしょうか。その人にとっては決して表に出したくない出来事でした。褒められたことではない、その男にまつわる事件が、今17歳の少年に思わしくない行状として現れたと私は受けとめました。今から40年ほどの前のことですが、実に新鮮にその話に聞き入ったことがありました。

### ➤ 王仁三郎の下から輩出した教祖たち

王仁三郎は1935(昭和10)年の第二次大本事件で6年8か月ほど獄中生活を強いられ、戦後の1948(昭和23)年、亡くなりました。その死までの数年間で〈耀椀〉と呼ばれる茶碗を3000個ほど創ったのですから、本当に並の人間ではでないようなエネルギーに満ちた人間でした。その広くて懐の深い王仁三郎の下から「成長の家」の谷口雅春、お光様として有名な世界救世教を立ち上げた岡田茂吉などが飛び立ち新たな教団を樹立しました。

宗教家だけでなく、合気道の創始者である植芝盛平も王仁三郎の下にいました。植芝が綾部に移住する際、王仁三郎に挨拶に伺うと王仁三郎は「武の道を天職とさだめ、その道を究めることによって大宇宙の神、幽、現三界に自在に生きることじゃ。大東流(植芝が当時所属していた合気柔術)も結構だが、まだ神人一如の真の武とは思われぬ。あんたは、植芝流でいきなされ」と語ったということです。

そして大本に入信し王仁三郎の側近として1924年、王仁三郎が蒙古入りした際には、ボディガードとして王仁三郎を守りました。

王仁三郎は植芝に多大な影響を与えました。合気道という命名も王仁三郎がつけたという説もあり、また王仁三郎は、合気に愛気を掛け合わせて、気を愛することの意味を示したようです。

植芝は道場で、出口なおのお筆先の冒頭の言葉、「三千世界、一度に開く梅の花」と声を出して手を開き、続いて「梅で開いて松で治める」と述べて手を結ぶ動作をしていたそうです。

鶴見俊輔が言うように、人を縛らなかった王仁三郎の下から多くの人材が飛び立ちました。